生涯学習情報紙
ら・ら・ら
Life Long Learning

第25号
発行日 平成15年3月31日
発行者 江別市生涯学習推進協議会
編　集 広報小委員会
連絡先 江別市教育委員会生涯学習課
〈高砂町24・381－1062〉

完全学校週5日制
～学校・家庭・地域の役割～

昨年の4月から完全学校週5日制と、文部科学省の新しい学習指導要領が導入されました。「ゆとり」と「生きる力」を重視した各学校では、完全5日制と子どもや学校・地域の実態に即した教育課程の計画による本格的な実践の取り組みを進めています。こうした中、毎週土曜日が休みになり、子ども達の生活や行動がどう変わったのでしょうか。

5日制実施初年度の調査として、小学生と中学生を対象に江別市教育研究所でアンケートを実施しました。その結果、子ども達が選んだ過し方は、小学生と中学生、また、男女によっても多少異なりますが、「テレビを見たり、音楽を聴いて」、「マンガの本を読む」、「買い物」などが中心となっているようです。

また、小学生と中学生を比較してみると、小学生の過し方はいわゆる「くつろぎ型」といってよいでしょう。「テレビやマンガ、ゲーム」など自分の時間を楽しむほか、「家族とのくつろぎや買い物、旅行」、「戸外の遊び」など、多様な生活ぶりが伺えます。

一方、中学生は、「部活動」のウエイトがかなり高く、その分その他の時間の使い方に影響があるようです。疲れからの開放とも受け取れる「何もしないでのんびりと」や「テレビを見たり音楽を聴いて」、その他「マンガやゲーム」など、一人でくつろぐ過し方が主流を占め、小学生のように「家族と一緒に」という諸々の行動が大きく減少しています。

休日の勉強については、小学生の方が中学生よりやや多いという結果がでています。家庭教育の是非の議論もありますが、学校5日制になって勉強ばなれがさらに進行するのではという危惧もあります。

この調査結果から、子ども達の土日の過ごし方がある程度見てとれますが、市内の子ども達には「休みの日に何をしていいのか分からない」、「何かしたいけど機会がない」…という子どもも多数います。こういった子ども達のために、学校と地域の方が協力して、子どもが日本の伝統的な文化に触れる事業として市内14小学校で『土曜広場』が行われました。7月から11月までの土曜日、毎月2回程度、地域・学校を会場に囲碁や手編みなどの活動を行いました。

運営・指導にあたるスタッフは、地域で文化活動を進めている方、活動に協力していただける方、学生、元教員、父母の方など、総勢70名のボランティアのみなさんです。特に、人気のテレビアニメの影響のためか囲碁の希望が大変多く、地域の囲碁同好会やお年寄りグループの方に指導の協力をお願いしました。

このように教育は学校だけできるものではなく、家庭や地域が教育の場として十分に力を発揮しなければ、子どもの健やかな成長はあり得ません。

学校週5日制が子ども達にとって、本当に有意義なものとなるためには、家庭や地域社会の協力が必要です。家庭では社会で生活していく上で大切なことを、家族のふれあいをとおしてきちんと身につけさせることが重要です。また、地域で子ども達に様々な活動の機会や場を提供したり、指導者やボランティアとして、積極的に子ども達と関わりながら地域ぐるみで子どもを育てていく意識を高めていくことも必要と思われます。今後も5日制の導入に伴う子ども達の変化、また地域のさまざまな取り組みについて、掲載していきたいと思います。

第2回生涯学習フォーラム終了

11／21～12／14

昨年度に引き続き、〝子どもの心〟をテーマに「第2回生涯学習フォーラム」が開催されました。心の問題は非常に重要なテーマであり、簡単に答えが出せる事ではありません。変化の激しい現代社会ではストレスを抱える事が多く、精神的にまだ弱い子ども達にとっては大事な問題です。今回は、小児精神科医、俳優・戯曲作家、児童相談員、警察と4人の専門家のお話を聞きました。延べ、152人の参加があり、好評のうちに終了することができました。様々な角度から心の問題について講演をしていただきましたが、これが問題解決の糸口になれば幸いです。

また、情報図書館では、国際アンデルセン賞とIBBYオナーリスト図書展が開かれ、多くの方に各国の本を手に取って楽しんでもらいました。世界中の子どもの本を通して、国際理解や親しみを覚えたのではないでしょうか。

そして、最終日の12月14日㈯にはコミュニティセンターで「おはなしなあに」の皆さんによる絵本の読み聞かせや、児童文学作家の柴村紀代さんによる講演、また、朗読の会の松村美智子さんによる朗読などが行われました。アンデルセンの「えんどう豆の上にねむったお姫さま」とアンソニー・ブラウンの「ゴリラ」の映像を見て、個々の作者の人生が豊かに描き込められていたと思います。また講演では、国際アンデルセン賞受賞者の作品からの、絵本の読み聞かせや、アンデルセンの作品からの朗読など、当日は90名程度と若干寂しいものがありましたが、参加された皆さんからは大変好評でした。

代を問うⅡ

～思春期のこころ～

講師　氏家　武氏

思春期は子どもが大人に成長していく過程で心理的に大きな変化が生じる時期です。無邪気な子どもが一人前の大人になるためには、幾つかの課題に直面し克服していかなければなりません。

まず、子ども達は親や大人から情緒的に独立できるようにならなければなりません。親に頼ることなく自立的に行動することが求められます。自立をめぐって親子の争いが始まるのがこの頃です。

次に同世代集団への参加や仲間作りが始まります。親から分離する一方で、子ども達は切磋琢磨し自我の強さを身につける一方で、同じ価値観を共有し一個人として認められる居心地の良い場を確保することができるのです。

さらに、親や大人からの分離独立によって、子ども達は自意識に目覚めます。自分の個性や能力に気づき、将来の現実的な展望を抱くようになります。思春期は子ども同士や子どもと大人がいい意味でぶつかり合う時期で、大人は上手に相手をしながら大切なことをしっかり伝えなければならないのです。

“夢”可能性を見出すために

講師　金田一仁志 氏

コミュニケーションを交わす時には相手の目を見て相槌を打つことが必要です。あなたの話を私は理解しようとしていますよ、ということを伝える事が大事です。ちゃんとした相槌を打つだけで、話が盛り上がってきます。会話にはエックステンド（詳しく広げていくこと）、アドバンス（進める、進展させること）が必要になってきます。会話を広げ、自分が笑顔になりたかったら、相手に笑顔をかけなければなりません。そうしたら自分に帰ってきます。

また、人間の体の中には陰と陽があります。いやな事があったらいいこともあります。陽には明るい、希望などのプラスのイメージ。陰には暗い、不安などがあります。陰の顔で陰の姿勢で歩いてもいいことはありません。陰の面が広がったらどうすればいいか。それには笑うことが大事です。悪いものを改正する、身体の中から直していく事が必要です。ため息ばかりついていると幸せが逃げていってしまいます。

こころの時

児童虐待は増えているか

講師　長野　正稔 氏

児童虐待は社会問題化しており、増え続けているといわれているがその要因は何なのか？

まず、児童虐待には身体的虐待と性的虐待があり、身体的虐待はなぐる、けるなど、性的虐待は子どもをワイセツな行為の対象とすることである。このような虐待をする家庭の特徴としては近所付き合いがないなど、地域との係わりが少ない傾向がある。

虐待が起こる要因としては、大人が幼稚化しているなど、大人側の問題が多い。こうした虐待を受けた子はどうなるのか。親の顔色を伺ったり、落ち着きがなくなる。暴力で自分を守ろうとする。無気力な子になるなどの特徴がある。

虐待をする親も自分が子どものころ同様なことをされてきている人が多いが、学習できていない。本州では、虐待をしている親が集まって話し合い、自分達をコントロールしようとしている。1人で悩まなくてすむ、集まりの場を作るシステムの構築が今後必要である。

“性”と“麻薬”

講師　田村　　隆 氏

若者、特に少女の性非行が増加している。巷ではブルセラショップなどの性産業が増え、利用する少女が増えている。

また出会い系サイトなどを利用する少女も増えているが、これは子どもが家にいても親がかまってくれずさみしい、孤独感を感じるなど、温もりを求めているにもかかわらず、親が気づいてやれない事が一つの原因である。親は本気で叱ったり、褒めたりすることが大事である。

一方、麻薬に関しては友達同士の付き合いがきっかけで始める事が多い。普通の子が親との喧嘩などのふとしたきっかけで手を出す事もある。そういう少女をねらった暴力団の手口として、やさしい人間を装って近づき、リラックスさせてからただでドラックをやらせる。止められなくなってから、売りつけ、金がなければ仕事をやらせ、ヤクザの資金源にしている。

非行は家庭から始まる事が多いが、親は子どもとの接し方を考え、時には厳しく接しなければならない。

シンポジューム

柴村先生

IBBYは、ドイツ生まれのレップマンにより設立されました。彼女は第２次大戦後、荒廃したドイツの子ども達を見て、子ども達のために世界中に本の寄付を呼び掛けました。この結果、世界中から多くの本が集まり、この本を収録した国際青少年図書館を1948年に開館、その４年後にケストナーやリンドグレーンの協力も得てIBBYは誕生しました。

IBBYには色々な作者の本があります。子どもの本の作家で有名なアンデルセンは、多くの作品を世に出しましたが、作品には自身の人生が投影されていると思います。特に「みにくいあひるの子」は、非常に背が高く、顔も美男子とは言えないアンデルセンの自伝だと言われてきました。みにくいあひるの子が、最後に白鳥の子だとわかりましたが、そういう幸せをだれでも持てるわけではありません。アンデルセンほど庶民の哀感をよく知っていた作者はいません。人生に希望を失わなかったアンデルセンは、その童話の多くが最後は神への感謝につながって、ある意味では、神頼みの甘い結末が多いように言われてきましたが、それでも、自分の前半生の辛い世間の仕打ちはこんな形で作品に投影されています。

絵本にしろ、児童文学にしろ、子どもに語りかける文学は、子どもだけのものではありません。そこには大人の小説では複雑で見えにくくなっている人生の最良のものが、人に対する信頼や愛が、子どもの文学にはまだたっぷりと描かれています。自分を信じ、自分を大切にする事を呼びかけています。子どもはまだ自分の内なる力に信頼をおくということがどういうことかわかっていません。だから、何か困った事をするとどうしていいかわからず、泣き出すのです。でも、子どもの本は、子ども達に困難な事に出会っても大丈夫。主人公達はいつも最後には正しい道を見つけて幸福になれる事を約束します。子ども達は、気づかぬ内に多くの励ましとなぐさめを子どもの本から受けることができるのです。だからこそ、子どもの本は人生の真実を語らなければなりません。

今、子ども達の読書量は落ち、本から人生を学ぶなどと言うまどろっこしい方法を敬遠しがちです。でも、１冊の絵本からもこんな豊かな人生が語られているのです。私達はあきらめることなく、子ども達に子どもの本を心を込めて渡していかなければなりません。回り道のようでも、私も子ども達に子どもの本のすばらしさを伝え続けたいと思っています。

マイ・ブーム

みゆきオンマイマインド

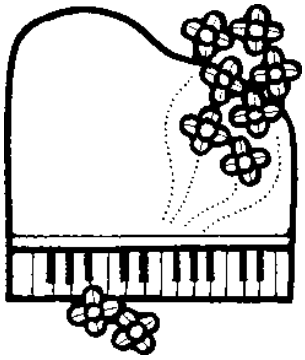
伊藤　祐輔さん

私は今、キーボードに熱中しています。キーボードとは、電子ピアノやエレクトーンを小型にしたものです。値段はピンからキリまでありますが、キリの方で我慢しています。私が愛用しているものは、アマチュア向けのもので、他のメーカーにはない自動伴奏ができるものです。演奏したい曲のリズムをセットし、ピアノコードを左手で、メロディを右手で弾くと、キーボード内のコンピューターが自動的に伴奏をアレンジしてくれるのです。この楽器を始めて5年になりますが、飽きずに続けています。

現在練習しているものは、中島みゆきの作曲したものが中心です。私のお気に入りのベストスリーは、「雨」、「黄砂に吹かれて」、「悪女」です。彼女の曲は、男性に振られた内容のものが絶品だと思います。

暗譜で弾けるようになるには二週間位かかりますが、ひとたびメロディ・リズム・ハーモニーがうまくシンクロすれば、中島みゆきの世界に浸ることができるのです。その時を求めて、少しでも楽譜が見えるよう老眼鏡を新調し、動きのにぶくなった指先で、毎日チャレンジしております。

（江別市国際交流協会）

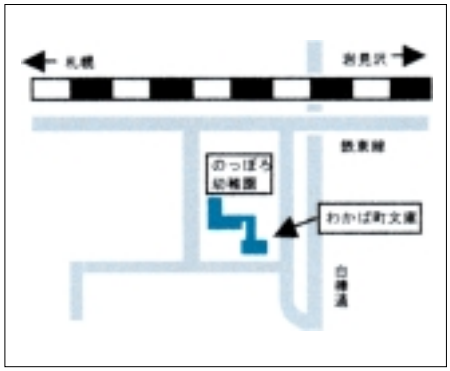


編集後記

寒い日が続いています。先日、蒼樹大学の学習会で、江別在住の登山家である江崎幸一さんの講演を聞きに行きました。エベレストなど海外の有名な山を数多く登頂されている様でとても魅力的な人でした。この講演を聞いて、山に限らず人間は常に目標を持ち、その実現に向けて絶えず努力していく事が大事だと学びました。とても素敵な歳の重ね方をしていると感じました。私も努力して魅力的な男にならなければ…。

野幌に情報図書館ができるずっと前、もう30年近くも昔に鉄道の南、教会の2階にできたのが「わかば町文庫」です。教会と隣接する幼稚園の関係者や大学の先生、学生、そして教会に通う人達の「まちに図書館を創ろう。」という想いが結集して誕生しました。初めは大人の本もたくさんあり、中には大学の憲法の先生から専門書が寄贈されたり、受験参考書がずらりと並んでいた程でした。しかし、情報図書館ができたことにより、子どもの本を中心に置くようになりました。

文庫内は想像以上に広く、中央に10畳ぐらいのカーペットの敷かれたスペースがあり、月1回行われる「おはなし会（絵本読み聞かせ・紙芝居・工作の3本立て）」の時にはたくさんの子ども達がその場を埋め尽くすそうです。書棚には、絵本・日本の本・外国の本・自然科学の本・マンガなど八千冊の蔵書があり、その場で読むこともできるし、借りていくこともできます。1人1回4冊までという制限ながら一日に百冊以上借りられることも。本当にたくさんの子ども達が利用しているんですね。「こんな本を置いて欲しい」という要望があれば、限られた予算をやりくりして購入してくれることもあるそうです。

帰りがけ書棚を何気なく見るとラベルの番号が不揃いでした。直さないのかと訊いてみると、「図書館法に基づいて分類しても、担当者が代わる度それぞれの考え方の違いで少しずつずれて行くんです。今ではもうそのままでいいかなと…。」そう聞くと、かえってその不揃いさが20年余の活動の歴史を感じさせてくれました。11名のスタッフみなさんがボランティア。決して無理をしない肩肘張らないやり方が長年続けてこられたコツのようです。

《貸し出し》
毎週火曜日　13：50～16：00
《おはなし会》
毎月第3火曜日　14：20～
《住所》
野幌若葉町3－8
《電話》
382－2706（野幌教会）